

評価項目		自己評価			評価者からの意見及び評価	
大項目(領域)	小項目(目標)	取組状況と成果・課題	評価	改善策		
5	特別支援教育	特別支援教育の組織的な取組 ◆教職員「校内教育支援委員会において、支援が必要な子どもたちの状況とかかわり方について共有し、支援の検証改善を行うなど、組織的な取組を行っている」	(大曲小)関係機関との連携を強化してきた。様々な教育的ニーズに応えられるようにするため、校内体制についても特別支援教育コーディネーターに限定することなく、管理職や担任外教諭、養護教諭、心の教室相談員など、様々な視点からのアセスメントを行い、分担して寄り添った対応を行っていることが、一定の成果を上げている。	A	組織としての対応を徹底し、スピーディな対応に今後も努めていきたい。学校だけで完結させることを目的とするのではなく、関係機関との連携を強化し、専門的な教育相談や子育て相談に対応できる体制を構築していきたい。	A
		(東小)校内特別支援委員会は、定期的に開催し、特別支援コーディネーターを中心に児童理解や支援について協議している。また、必要に応じて会議などの場で共通理解を図ることなどもしてきた。関係機関との連携は、管理職を中心にに行い必要な支援ができるように努めてきた。今年度、特別支援コーディネーターの積極的な働きかけで、児童の実態を保護者に理解してもらい、共通認識のもと必要な支援ができるようになった事例も多かった。今後も、児童一人ひとりの実態を把握しニーズに合った支援ができるように組織的に進めていく必要がある。	B	過去に担任一人に任せがちになった時期があり、子どもの実態が保護者に十分伝わっておらず高学年になるまでに、必要な支援ができていなかったり、保護者との共通理解ができていなかったりしたことで、学級経営に関わるような大きなこともあった。今後も、組織的に児童一人ひとりの実態や困り感をしっかりと把握し、保護者との共通理解を図り、その児童にとって必要な支援ができるように努めていく。		
		(大曲中)特別支援教育コーディネーターを中心に、適宜校内教育支援委員会を開催し、支援の方向性について協議を行っている。年度途中の新たな要望等にも対応できている。 ○毎月の職員会議の中で、支援が必要な生徒の「個別の指導計画(サポートシート)」についての共通理解を図り、進捗状況等について交流している。	A	引き続き「個別の指導計画(サポートシート)」にもとづき、生徒の個性に応じた指導を行っている。通常学級においても特別支援教育支援員を活用し、困り感を抱える生徒等に個別の支援を行っている。特別支援教育に関する研修機会を設定して、次年度に向け、特別支援教育をより充実させるための体制を構築する。		
6	小中一貫教育(北広島市共通実践課題)	大曲中学校区3校の共通実践の取組 ◆教職員「授業スタンダードの徹底と工夫や、重点単元を設定した指導の工夫など、共通実践を心がけ、その検証改善に努めている」	(大曲小)校内研究を軸としながら、職員の共通理解のもと授業改善に取り組んできた。今年度は、中学校区において市内の研究センター校発表会を開催し、広(実践を発信)することができた。教職員のキャリアに応じた研修を積みつつ、時代の要請に応えようとする意識が高まってきたと感じる。	A	日常実践の交流や研究授業を通じて、仮説の検証に努め、児童の成長に資する校内研究をより充実したものとしていきたい。対話を重視し、ICTを効果的に活用した学力向上に向けた取組を今後も徹底していきたいと考える。	A
		(東小)11月に実施した研究センター校発表会にむけての校内研究で、「授業スタンダード」を基盤とした授業がしっかりと定着し、共通の意識と取組で授業改善を職員が一体となって進めることができた。一方で、研究を進める中で軽しさを感じた部分や見えてきた課題があった。特に、児童に必要な資質能力を育成することは、一朝一夕にはいかならず系統的・継続的に地道な実践の積み上げが重要で、さらなる授業改善によって質の向上が必要である。	B	次年度に向けて、定着している「授業スタンダード」を基盤に、対話やICTなどを手立てとして、児童に必要な力を育成できるように努めていく。そのためには、前述しているように児童が「わかった・できた」を実感できるように、児童主体の授業への転換を図り、「学ぶ楽しさ」を味わっていただけるように努めていく。		
		(大曲中)広域教研センター校発表会に向けた全教職員による校内研修を通して「授業スタンダード」による組織的な授業改善を進めることができた。 ◆重点単元を設定した指導(読み取る力・書く力・説明する力の育成)については工夫改善の余地が残る。教科横断的にねばり強く取り組んでいかないと、成果につながらないと感じる。	A	今後も組織的に授業改善を進めていけるよう、全教職員による校内研修を行う。目指す子ども像の実現に向け、生徒の実態を踏まえた、校内研究主題を設定する。重点単元(資質・能力)の指導を教科横断的に強化する。また、今子どもたちに求められている力について、高校入試問題や全国学力学習状況調査の結果分析を踏まえた学習指導を行う。		
7	(学校設定項目)	豊かな感性を培う生徒の育成 ○児童生徒「他人に笑顔で温かい言葉がけで思いやりをもっと接している」 □保護者「学校が温かい雰囲気ですごく楽しく、安心して登校できる学校になっている」 ◆教職員「生徒への声かけ、生徒との相談活動を行い、生徒との信頼関係を構築している」	(大曲小)子どもの身近に悩みや困りごとを相談できる環境を構築することを目標として、組織的対応を行ってきた。教職員はもろろんのこと、外部専門家との連携を強化することで、効果をあげている。多様性を尊重する態度や人間性を豊かに育む視点を今後も重視し、教育活動を展開する必要性を強く感じる。	A	道徳科を要しながら、今後も全ての教育活動の中で重視していく必要があると捉える。自他の生命を大切にすることを意識し、思いやりや心を育むための児童会活動についても充実させ、学校全体で温かな支持の風土や文化を構築したい。	A
		(東小)学校経営の柱である「温かさ」が、児童・保護者に根付き、大切にされてきたことがうかがえる結果となっている。特に「温かさ」を支える「挨拶」は、地域・保護者のサポートや教職員の姿勢によって児童に浸透し、築き上げられてきた。一方で、職員の中からは教師からの働きかけだけでなく、児童の自発性・ヘルプして時期に来ているのではないかと話となった。	A	これまで学校経営の肝となっていた「温かさ」を基に、更なるステップアップを目指し、「学ぶ楽しさ」を柱とした学校づくりに努める。すべての教育活動で「学ぶ楽しさ」を感じられるようにするために、学校は学級経営の安定や授業改革に力を注ぎ、自己肯定感が高まる機会や場を意識的に設ける。子どもたちが「学校が楽しい」と感じ、より良い学校生活を送るために、自発的・主体的に行動する児童の育成を目指す。		
		(大曲中)多く(88%)の生徒が肯定的に回答し、4と回答する生徒が10%増えている。保護者の肯定的回答も増えている。生徒一人ひとりに寄り添い、信頼関係を大切にしながら指導を継続してきた成果と捉えている。 ◆学校生活に対して否定的な感情を持っている生徒に対して、引き続き丁寧な対応が求められる。	A	生徒一人ひとりを大切にして、互いの個性や多様性を認め合い、安心して学校生活を送れるような風土をつついで、生徒への思いやり、声かけ、励まし、賞賛、対話など、授業・行事等を通じた個と集団への働きかけを大切にして、今後も生徒の発達を支える生徒指導を基盤として行っていく。		

今後の方向性について

<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が地域で活躍できる場面があるよ(地域と一緒にできる行事。例えば大曲夏祭り等で昔は生徒会企画があった)。 ・学校から「困っているから来て」というSOSを、プロジェクトに発信してほしい(防災に関わる取組で、共にできることがあるかもしれない)。 ・多くの児童生徒が前向きに学校生活を送ることができている。児童生徒の自己有用感をより高めるために、学級への所属感や授業の中で学ぶ楽しさを感じることができる教育活動を大切にしてい。キャリア形成の指導にも力を入れていく。 ・学校では、3校共通の視点で授業改善を進めることで、主体的に学びに向かう生徒が増えていると感じている。一方、家庭学習については保護者と情報を共有し、家庭学習の量と質の向上が不可欠である。端末の利用も検討していく。 ・多くの児童生徒が落ち着いた学校生活を送っており、大曲スタンダードの定着についても一定程度の評価ができる。教師の指導はもちろん必要だが、児童生徒の主体的な取組を重視しながら安心・安全な学校風土を醸成してきたし。 ・SNS利用に関する問題は、PTAや学校運営協議会とも情報共有して啓発活動を進めているところである。これまでも再三にわたり社会生活に必要なマナーやモラルについての指導をしているが、今後もねばり強く継続していく。
